

新しい生活様式 どう定着

感染予防へ「楽しい工夫を」

新型コロナウイルス特別措置法に基づく緊急事態宣言が全面解除されて1週間となった1日、全国の行楽施設などで予防対策の徹底を前提に、営業再開の動きが広がった。

感染予防のためとして国が求める「新しい生活様式」はその後、社会にどの程度根付くのか。人の行動を自然に促す学問「仕掛学」で知られる大阪大学大学院経済学研究科の松村真宏教授は、「コロナ禍が新しいアイデアのチャンスになれば」と話す。



松村真宏教授

(政府専門家会議の資料から)

基本対策	人との間隔は2m、症状なくてもマスク。帰宅後すぐに着替えやシャワー
移動	会った人と場所をメモ
生活	頻繁な手洗い、換気
買い物	少人数ですいた時間に素早く
娯楽・スポーツ	歌や応援は、十分な距離を取る
公共交通機関	会話は控え、混んだ時間を避ける
食事	大皿は避け、横並びで座る

「真実の口」で消毒

彫刻「真実の口」を横したアルコール消毒器を大阪大学医学部付属病院（大阪府吹田市）に設置し、人が思わず手を入れる「仕掛け」だと話題になった松村教授。国が示した新しい生活様式は「そのまま定着しないと思う」と見込む。

国は①身体的距離の確保②マスク着用③手洗い④基本に、〈誰とどこで会ったかをメモ〉〈食事は対面ではなく横並びで〉など、細かく例示。だが、松村教授は実践例の〈食事の際は料理に集中し、おしゃべりは控えめに〉は、「そんなことは誰もやりたいと思わ



大阪大病院に設置された「真実の口」 大阪府吹田市

ない」と指摘。示された例は緊急避難的で極端な例もあるとし、「ちよつどいい落としどころを探していく形になる」と予想する。

並ぶ位置を目印で示す対策は「『社会規範の見える化』でもある」と分析。一方、あらゆる場所でのマスク着用や対人距離の確保は「周囲の目を気にしているだけのように見える」とも。「メリットの実感が乏しかったりするものほど消えやすい」と指摘する。事業者や学校などの現場ではさまざまな工夫が求め

られている。松村教授は「あおしなさい、こうしなさいと呼びかける強制ではなく、その方が楽しいと思ってもらえるようなアプローチが望ましい」とする。

アイデア生む好機

一方、定着を確信するのは、テレワークやオンライン授業などだ。「通勤・通学時間がなくなり、うまく時間を使えるようになった」。コロナ禍は人々の行動を短期的に変え、新たな選択肢を突きつけているが、「次のアイデアが生まれるチャンスになれば」。数々の試行錯誤の先に、よい仕掛けの種が残っている。と信じている。